
令和 6 年度

全国学力・学習状況調査結果及び分析

佐倉市教育センター

目 次

<u>I 令和6年度全国学力学習状況調査について</u>	1
<u>II 教科の分析</u>	2
○ 小学校 国語	2
○ 小学校 算数	3
○ 中学校 国語	4
○ 中学校 数学	5
<u>III 児童生徒質問紙の分析</u>	6
<u>IV 学校質問紙の分析</u>	8

I 令和6年度 全国学力・学習状況調査について

1 調査実施日

令和6年4月18日（木）

2 調査目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

（「令和6年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」より）

3 結果公表の趣旨

本調査において、市内小中学校全体の結果を公表することは、佐倉市教育委員会が保護者や地域住民の方々に対し、説明責任を果たすことになる。また、分析した調査結果は、各学校における教育活動の改善に生かすとともに、佐倉市教育委員会の施策に資するために活用する。

ただし、本調査により測定できるのは学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎない。以上のことを考慮し、学校では、教育活動の取組状況と本調査結果の分析を踏まえた指導改善策を併せて示すことで、児童生徒の学力向上に資することが望ましい。

4 調査対象

学校種	実施校数	当日実施した児童生徒数	
		国語	算数・数学
小学校	23校	1, 245人	1, 240人
中学校	11校	1, 225人	1, 220人

5 結果一覧

(1) 小学校 (%)

	小学校国語	小学校算数	中学校国語	中学校数学
佐倉市	66	62	57	54
千葉県	67	63	57	51
全国	67. 7	63. 4	58. 1	52. 5

Ⅱ 教科の分析【小学校国語】

1 小学校国語の平均正答率

問題数 14問	佐倉市(公立)	66%
	千葉県(公立)	67%
	全国 (公立)	67.7%

2 小学校国語に関する調査の結果の概要

○:成果 ▲:課題 (佐倉市正答率/全国正答率)

- 『人物像を具体的に想像することができる(読むこと)』(74.6/72.5)
- 『目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にする(書くこと)』(80.8/80.3)
- 『情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる(情報の扱い方に関する事項)』(87.3/86.9)
- ▲『目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる(書くこと)』(53.2/56.8)
- ▲『人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる(読むこと)』(69.2/72.6)
- ▲『文の中における主語と述語との関係を捉えることができる(言葉の特徴や使い方に関する事項)』(59.5/62.3)

3 小学校国語に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

- ・思考力・表現力・判断力等における「話すこと・聞くこと」を問う設問において全国平均より低い傾向がみられる。
- ・言葉の特徴や使い方に関する事項において、課題がみられる。漢字は一文字を答える問題においては全国平均よりも高かったが、二字熟語になると低くなる傾向がある。また、主語や述語を問うような文法問題においても課題がみられる。
- ・解答形式としては、記述式の解答において課題がみられる。

4 小学校国語の改善策

- ☆他者へ伝えるときには、複雑な構文を避けた表現になっているか、聞き手や場面の状況を踏まえた発言になっているかなどを意識しながら、友人と交流するように学習することが大切である。
- ☆当該学年の前の学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使おうとする習慣を身に付けるようにするとともに、当該学年に配当されている漢字を文や文章の中で徐々に使うようにすることが重要である。

Ⅱ 教科の分析 【小学校算数】

1 小学校算数の平均正答率

問題数 16問	佐倉市(公立)	62%
	千葉県(公立)	63%
	全国 (公立)	63.4%

2 小学校算数に関する調査の結果の概要

○:成果 ▲:課題 (佐倉市正答率/全国正答率)

- 『速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察することができる(変化と関係)』(72.6/70.0)
- 『直方体の見取り図について理解し、書くことができる(図形)』(86.9/85.5)
- 『数量の関係を、□を用いた式に表すことができる(数と計算)』(89.7/88.5)
- ▲『道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる(変化と関係)』(26.0/31.0)
- ▲『球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができる(図形)』(32.9/36.5)
- ▲『角柱の底面や側面に着目し、五角柱の面の数とその理由を言葉と数を用いて記述できる(図形)』(68.6/72.0)

3 小学校算数に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

- ・数と計算を求める問題は基本的に理解が定着しているが、問題文が文章題のときに正答率が低くなる傾向がみられる。
- ・基礎的な見取り図に関する問題や速さと距離から時間を求める問題については理解をしているが、応用的な図形や変化の関係を求める問題において課題がみられる。
- ・解答形式としては、記述式の解答において課題がみられる。

4 小学校算数の改善策

- ☆図形を構成する要素に着目し、底面や側面という用語を用いて角柱の性質について説明できるようにすることが重要である。底面の形の違いに着目し、底面が三角形の場合は三角柱、四角形の場合は四角柱、五角形の場合は五角柱となることや、側面の形は全て正方形や長方形であることに気付くことができるようにすることが大切である。
- ☆場面や目的に応じて、単位時間あたりに移動する長さや、一定の長さを移動するのにかかる時間として速さを捉え、速さを比べることができるようにすることが重要である。

Ⅱ 教科の分析 【中学校国語】

1 中学校国語の平均正答率

問題数 15問	佐倉市(公立)	57%
	千葉県(公立)	57%
	全国 (公立)	58.1%

2 中学校国語に関する調査の結果の概要

○:成果 ▲:課題 (佐倉市正答率/全国正答率)

- 『必要に応じて質問しながら話の内容を捉えることができる(話すこと・聞くこと)』(66.9/63.2)
- 『話し合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができる(話すこと・聞くこと)』(46.4/44.7)
- 『資料を用いて、自分の考えがわかりやすく伝わるように話すことができる(話すこと・聞くこと)』(69.2/68.5)
- ▲『短歌の内容について、描写を基にとらえることができる(読むこと)』(43.6/48.3)
- ▲『表現の技法について理解している(言葉の特徴や使い方に関する事項)』(51.3/54.9)
- ▲『文脈に即して漢字を正しく書くことができる(言葉や特徴の使い方に関する事項)』(66.0/68.8)

3 中学校国語に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

- ・思考力・表現力・判断力等における「話すこと・聞くこと」を求める問題では、文章中における話し合いがどのような段階にあるのかを捉えながら読み取ることができている。
- ・短歌に関する出題については全体的に課題が見られる。特に表現の技法や短歌の描写について理解を深める必要がある。
- ・解答形式としては、記述式の解答において成果がみられる。

4 中学校国語の改善策

- ☆図表や写真などを含む説明的な文章を読む際には、示されている図表などが、文章のどの部分と関連しているのかを確認するなどして、書き手の伝えたい内容をより正確に読み取ること、図表などを示すことで文章にどのような効果が生まれているのかを考えることが重要である。
- ☆実際に書く活動を通して、漢字を正しく用いる態度と習慣とを養うことが大切である。また、1人1台端末等を活用して文字を入力する際にも、漢字がもつ意味に注意して、適切に選択する力を養うことが重要である。
- ☆文学的な文章では、用いられている語句や表現が、文章の内容を伝えたり印象付けたりする上で、どのように働いているのかを考えることが重要である。特に、短歌や俳句などは、限られた音数の中で情景や心情を伝えるために表現が工夫されていることを踏まえ、描写の仕方や表現の技法などに着目することが大切である。

Ⅱ 教科の分析 【中学校数学】

1 中学校数学の平均正答率

問題数 15問	佐倉市(公立)	54%
	千葉県(公立)	51%
	全国 (公立)	52.5%

2 中学校数学に関する調査の結果の概要

○:成果 ▲:課題 (佐倉市正答率/全国正答率)

- 『等式を目的に応じて変形することができる(数と式)』(58.0/52.5)
- 『回転移動について理解している(図形)』(72.0/68.3)
- 『与えられたデータから最頻値を求めることができる(データの活用)』(77.7/74.3)
- ▲『複数の集団のデータ分布から、四分位範囲を比較することができる(データの活用)』(44.4/48.5)
- ▲『目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明できる(数と式)』(32.1/35.9)
- ▲『複数のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる(データの活用)』(23.9/25.9)

3 中学校数学に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

- ・知識・技能を問う設問において概ね定着している。特に、「数と式」「関数」の基礎的な問題において成果が表れている。
- ・「データの活用」において課題が見られる。特に、四分位範囲について複数の集団のデータの分布から展開される問題において理解を深める必要がある。
- ・解答形式としては、記述式の解答において課題がみられる。

4 中学校数学の改善策

- ☆データの分布の傾向を読み取って判断し、その理由を数学的な表現を用いて的確に説明できるように指導することが大切である。箱ひげ図を比較する場合には、判断の理由を箱の位置や四分位数などを根拠として説明できるようにすることが大切である。
- ☆事柄が一般的に成り立つ理由を、構想を立てて説明する場面を設定し、文字式や言葉を用いて根拠を明らかにできるように指導することが大切である。

Ⅲ 児童生徒質問紙の分析

※ ○：良好なもの ▲：課題が見られるもの ◎考察

基本的生活習と学習習慣

○小中学生ともに

『健康に過ごすために授業等で学習したことを普段の生活に役立てている』

『将来の夢や希望を持っている』

『人が困っているときは、進んで助けている』

『人の役に立つ人間になりたい』

『学校に行くのが楽しい』

『自分と違う意見について考えるのは楽しい』

『分からないことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫する』

の回答が、県・全国平均と比べて高い。

○中学生は、県や全国と比較して学校以外の学習時間が長い傾向にある。

○小学生で好きな教科を問う設問において、全国平均よりも高かったのは「国語(+3.0)」、「理科(+1.7)」、「英語(+0.2)」である。

○中学生で好きな教科を問う設問では、全ての教科が全国平均よりも高い。「国語(+4.0)」、「数学(+5.3)」、「理科(+8.0)」、「英語(+3.4)」

▲中学生は、『朝食を毎日食べている』、『毎日、同じくらいの時刻に寝ている』、『毎日、同じくらいの時刻に起きている』において、県、全国平均と比べて低い。

▲小学校では、県や全国と比較して学校以外の学習時間が短い傾向にある。

◎小中学生ともに

『毎日、同じくらいの時刻に起きている』

『分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている』

『新聞を読んでいる』

において、肯定的な回答をした児童生徒は平均正答率が高い傾向が見られた。

◎小中学生ともに『普段、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（スマートフォン等を含む）をするか』において、使用時間が少なければ少ないほど、平均点が高い傾向にある。

◎小学生において

『人の役に立つ人間になりたいと思う』

『地域や社会をよくするために何かしてみたい』

という質問に対して、肯定的な回答をした児童は平均正答率が高い傾向が見られた。

◎中学生において『自分と違う意見について考えることが楽しい』という質問に対して、肯定的な回答をした生徒は平均正答率が高い傾向が見られた。

◎『スマートフォン等の使い方について、家の人と約束したことを守っている』について、守っていないと答えた児童生徒の平均点は低い傾向にある。

ICTを活用した学習状況

- ▲小学校、中学校共に、学習の中でタブレットなどのICT機器を活用することに関して、有用感を感じている児童生徒は、県や全国と比較して低い傾向にあることがわかった。
- ▲小学校、中学校共に、授業におけるICT機器の使用頻度は、全国・千葉県の平均を大きく下回った。
- ◎タブレットなどのICT機器の使用頻度は、少ないことがわかった。一方で、ほぼ毎日ICT機器を使用していると回答した児童生徒の、国語、算数・数学における平均正答率は、他の項目を回答した児童生徒に比べ、高くないことがわかった。ただし、月に1回未満の使用頻度を回答した児童生徒は、どの教科においても、平均正答率が低いことがわかった。ICT機器は、単に使用すればよいというのでは不十分であり、児童生徒の実態や学習内容に応じて、効果的に活用することが求められる。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組

- 「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と回答した児童生徒の割合は全国・県の平均に比べて高かった。
- 「授業で学んだことを、次の授業や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができている」と回答した児童生徒の割合は全国・県の平均に比べて高かった。
- 中学校では、「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」と回答した割合は78%で高かった。(県比較 +4.0、全国比較 +2.4)
- ▲小学校では、「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」と回答した割合は77%と低かった。(県比較 -0.9、全国比較 -2.4)
- ◎主体的に学習に取り組む児童生徒が多いことがわかった。小中学校共に、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と回答した児童生徒の各教科の平均正答率が高かった。
- ◎自分の考えをまとめる活動は、本時の学習を振り返り、学びを深める重要な時間である。小学校の段階から、実態に即した学習のまとめを行い、振り返りを行うことが望ましい。中学校では、今後も自分の考えをまとめる活動を、続けていくことが重要である。

Ⅳ 学校質問紙の分析

※ ○：良好なもの ▲：課題が見られるもの ◎：考察

学校運営に関する状況 / 教員の資質向上に関する状況

- 小学校、中学校共に、教員が学級の問題を抱えた場合、率先して話し合いをもった割合が全国や県に比べて高かった。
- 小学校、中学校共に、学校運営の状況や課題を全職員で共有し、改善に向けて学校として組織的に取り組んでいる割合が全国や県に比べて高かった。
- ◎小中学校において、学級での問題や学校運営の課題に対して、組織的に対応して、解決を図っていることがわかった。

ＩＣＴを活用した学習状況

- 中学校において、教員が大型提示装置等（プロジェクター、電子黒板等）のＩＣＴ機器を活用した授業を全国や県に比べて多く行っていることがわかった。
- ▲小中学校において、タブレットを使用する授業を行う頻度が少ないことがわかった。
- ◎佐倉市におけるＩＣＴ機器を活用した学習状況は、全国や県に比べると使用頻度が少ないことが分かった。「自分の考えをまとめ、発表、表現する場面」「教職員と児童生徒がやりとりをする場面」「児童生徒同士がやりとりをする場面」いずれの場面についても、数値が低く、タブレットの使用頻度が『週に１回程度』『月に１回程度』の回答割合が多かった。
しかしながら、タブレットの使用頻度が『ほぼ毎日』『週に３回以上』と回答している学校も一定数あり、学校間、教員間で使用頻度の差を埋めていく努力をしていく必要がある。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

- 小学校において、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができる。」「授業では、自分で学ぶ内容を決め、計画を立てて学ぶ活動を行っている。」と回答した割合が、全国や県に比べて大幅に高かった。
- ▲中学校において、「各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができている」と回答した割合が、全国や県に比べ大幅に低かった。
- ◎小中学校全般的には、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組は良好である。しかしながら、一部の質問項目において、中学校で課題が見られた。

家庭学習

- 小中学校共に、「家庭学習について、児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行った」と回答した割合が、全国や県に比べて高かった。
- ▲中学校では、生徒が行った家庭学習の課題を、その後の教員の指導改善や児童生徒の学習改善に生かしている割合が低かった。
- ◎佐倉市では、佐倉型カリキュラム・マネジメントのもと、学校での学習時間と家庭での学習時間、両方においてバランスよく学ぶことが望ましい。学校全体で共通理解のもと、家庭学習の具体的な方法の提示をすることが重要である。